

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 10 月 22 日現在

機関番号：28002

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25862266

研究課題名(和文)ひとり暮らし高齢者の趣味活動による組織的見守りネットワークの形成

研究課題名(英文)Formation of an Organized Mutual Care Network through the Hobby Activities of Elderly Adults Living Alone

研究代表者

田場 由紀(TABA, YUKI)

沖縄県立看護大学・看護学部・講師

研究者番号：30549027

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、高齢者の趣味活動の場で利用者同士の交流実態と交流へのニーズから、組織的見守りネットワーク形成の可能性を検討することであった。趣味活動の場は、老いを自覚しながらも生活の張り合いをうみ、その結果生活リズムや健康行動に貢献していた。また人間関係は場の共有であり、一人暮らしであることによるうしろめたさや他者に干渉することへの負担感という老いの体験が関係の展開や発展を阻害していた。活動と負担のバランスは、自己完結への傾向とつながりへの傾向と両方を併せ持っていたことから、これらのつながりへの傾向を見出し、力づける支援方法の開発が課題である。

研究成果の概要(英文)：This study sought to investigate possibilities for the formation of an organized mutual care network based on the requirements and realities of social interaction among users of a hobby activity forum for the elderly. The forum in question gave a sense of purpose to the lives of its members even as they were conscious of growing older, and consequently it contributed to the establishment of daily rhythms and healthy behavior. In terms of personal relationships, however, relational development and expansion tended to be inhibited by elderly's personal experience of old age, which was shared throughout the forum as a sense of burden associated with feelings of guilt about living alone and a sense of encroaching on the lives of others. Personal relationships were not obligatory in the context of the hobby activities discussed on the forum, and priority was instead given to individual enjoyment.

研究分野：老年看護

キーワード：趣味活動 見守りネットワーク 一人暮らし高齢者

1. 研究開始当初の背景

地域包括ケアシステムの推進の一方で、孤立への危機感を抱くひとり暮らし高齢者自身の主体的な取組がある。近所づきあいが希薄化する中、趣味活動に参加することで他者との交流を求める高齢者が増加している(内閣府:2011)。主要産業の変化や交通の利便性に伴い、生活圏域が拡大し、人々が時間を共有する場は居住地(地縁)よりも目的を共有する組織での活動が多くなっている。成人期のほとんどを会社や趣味活動等の組織で過ごし、老年期を迎えた高齢者は、地縁での活動にはなじみにくいと考えられる。つまり、ひとり暮らし高齢者の見守りネットワークの形成には、会社や趣味活動等、目的を共有する組織的なコミュニティによる見守りネットワーク(以下、「組織的見守りネットワーク」)形成の検討も必要である。

ところで、高齢者の趣味活動の代表的な拠点として、老人福祉センターがある。趣味活動の効果として、仲間同士の交流、師弟関係の交流があり、これらの交流は生活の充実感や幸福感、健康に影響していると報告されている。また、趣味活動は、交流が定期的に繰り返されること、互いに認め合う信頼関係が形成されやすいこと、活動を通しての情報共有が容易であるというメリットがある。にもかかわらず、趣味活動の場で培われた仲間同士の交流は、老人福祉センターでの活動時間にとどまっている。これらの趣味活動の場での交流が日常生活上のつながりに発展することは、高齢者同士による組織的見守りネットワークの形成につながる可能性がある。以上のことから、ひとり暮らし高齢者の重層的な見守り体制の構築には、地縁的見守りネットワークと組織的見守りネットワークの双方から取り組むことが必要である。そのため、老人福祉センターの趣味活動を発展させた組織的

見守りネットワークの形成を試みることは意義がある。

2. 研究の目的

本研究では、高齢者の趣味活動の場である老人福祉センターという組織的なコミュニティのなかで、一人暮らし高齢者が体験している利用者同士の交流実態と交流へのニーズを把握し、組織的見守りネットワーク形成の可能性を検討することを目的とする。

3. 研究の方法

研究協力候補者は、人口317,969人中65歳以上人口57,077人、高齢化率18.0%の県庁所在地にある老人福祉センター(Aセンター)を利用する一人暮らし高齢者である。候補者の選定は、老人福祉センターへの協力者募集のポスター掲示とセンター管理者による情報提供を管理者に依頼した。老人福祉センター職員が把握している一人暮らし高齢者108名中、老人福祉センター管理者による研究協力依頼の説明に同意した者は32名であった。そのうち研究協力者は、研究者による研究の趣旨と内容の説明に同意した8名であった。年齢は最年少が67歳、最高齢は85歳であり、男性2名、女性6名であった。一人暮らし歴は最短が1年、最長が60年、一人暮らしに至る経緯は、配偶者との死別、子供らの独立、未婚の3タイプがあった。

2) データ収集

データ収集の期間は平成25年10月~平成26年10月であり、場所はセンター内のプライバシーが確保できる場所か本人の希望により居宅で行われた。方法は半構造化した面接質問紙調査であり、内容は、利用者の概要を把握するための質問6項目(年齢、家族構成、家族との交流状況、生活歴、一人暮らしの経緯、センター利用のきっかけ)利用者同士の交流実態

を把握するための質問4項目(活動内容とその頻度、趣味活動以外の場での仲間との交流、仲間との交流に対する意図や考え)、利用者同士の交流ニーズを把握するための質問3項目(仲間との交流に対する希望や要望、仲間との交流の効果、一人暮らしでの困りごと)とした。データ収集と分析は同時進行で実施さ、分析中に生じた疑問や不足している情報については、再度面接を依頼し回答を得た。面接内容の記録は、面接中に質問紙に記録しながら、本人の了解を得てICレコーダーに録音、質問紙の記録とICレコーダーから逐語録を起こしデータとした。

3) データ分析

データ分析は事例ごとに実施し、データ収集と同時に進行した。逐語録を精読し、交流ニーズと交流実態に影響を与えている老いの体験、あるいは老年期における一人暮らしの特徴を意識し、利用者ごとの交流実態と交流ニーズについての語りを取り出し、文脈を損なわないよう要約を作成した。さらに逐語録と要約を精読し、老いの体験、あるいは老年期における一人暮らしの特徴という視点で見出しを見つけ、要約間の関連を検討し、事例の全体像を導いた。最終的に全体像をまとめ、見出しの類似内容をまとめカテゴリーを作成した。高齢者の趣味活動の場である老人福祉センターという組織的なコミュニティにおける利用者同士の交流実態と交流へのニーズから、一人暮らし高齢者の組織的見守りネットワークの可能性を検討した。以下、本人の語りの原文を「」、要約を、見出しを《》、全体像のまとめにおいては見出しのカテゴリーを【】で示す。

4) 倫理的配慮

研究協力に関心を示した研究協力候補者に対しては、研究の主旨と内容に加え、調査の日程や場所について希望に応じること、

センターで面接を実施する場合には、センターの協力を得てプライバシーの確保できる空間で行うこと、面接内容については秘密を守り、研究中や研究結果の公表の際には個人が特定されないよう取り扱うこと、研究に関連するデータはすべて鍵のかかる場所で保管し、研究終了後は速やかにデータを破棄すること、研究協力に同意したあとでも断ることが可能であることを文書と口頭で説明、約束し、書面で同意を取り交わした。なお、本研究の実施にあたり、沖縄県立看護大学倫理審査委員会(承認番号13008)の審査を受け実施した。

4. 研究成果

1) 事例A氏の全体像

70代、男性で結婚し3人の娘を設けるが、60代で離婚、娘らが独立したことをきっかけに1年前から一人暮らしとなる。センター利用のきっかけは、何十年も所属している囲碁クラブの友人にいつでも囲碁ができる場所があると誘われたからである。

A氏が体験している利用者同士の交流実態と交流へのニーズについての語りの分析例を示す。「やっぱりねえ、家事を自分でやるけどさ、やっぱりこれは、(娘が)いたら助かるなと思うわけさ。困るって言ったらね。(中略)・・・(家事は)楽しいけどね、時間が少しかかるなあ、と。これ(家事を)をやっている間に...(中略)ただ時間が削られるという(感じ)。他にやりたいことが(あるけど)、これに時間がかかるでしょ。・・・(掃除とかが誰かに任せられたら)今やっている趣味(テニスや囲碁)に時間がかかけられるということ。囲碁は楽しい。テニスも楽しい。家にいたらいたで、寂しいさ、独りは。...(中略)昼はほとんど出かけているから、こっち来たり、図書館行ったり。だから、家に帰った時に、ふと寂しく感じるわけよ。」の語りをすべての家事を自分一人で行うということは、生活に

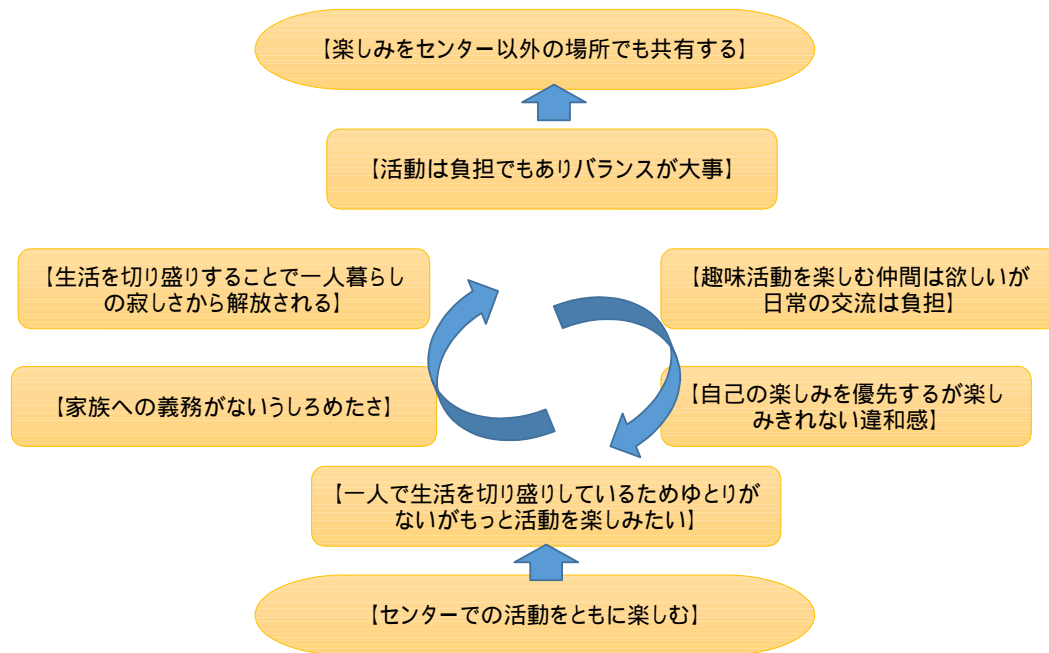
必要なことは全部自分の時間で行うということだから、楽しみのための活動は優先することができない。手伝ってくれる誰かがいれば、助けがあれば、時間を楽しみに使うことができると感じる。と要約し、見出しを《生活のすべてを一人で担うので楽しみの時間が増やせない》とした。同様の手続きで、A氏の語りからは11の見出しを抽出した。

11の見出しを用いてA氏が体験している利用者同士の交流実態とニーズについて全体像を記述する。《生活のすべてを一人で担うので楽しみの時間が増やせない》一方で、《楽しみを外に求めすぎると身体的な負担で生活リズムを乱すのでバランスをとる》必要に迫られ、《楽しみの活動はすべて外なので、家で過ごす時間は寂しさを感じる》としても、《家で一人で過ごす寂しさを紛らわせたいが、そのために何かに取り組むエネルギーはわからない》し、《新しいことを始めても壁にぶつかると中断し、中断していることを自覚するたび気が滅入る》思いを味わいながら、《誰も困らないと思えば自分でできる電球の取り換えさえも面倒で放ってしまう》状況である。センターでは、《依頼されサークルの立ち上げに協力したが世話係が負担で他者にゆずり、趣味を楽しむことに専念しているが、一方で勝敗への感情変化に違和感を持つ》ことや、《仲間が活動に誘いにくいことは承知していても、自分から誘って活動する気にはなれず、退屈を感じても他者の活動を観戦することに意味づけをして過ごしている》という趣味活動について若い時とは異なる体験をしており、趣味活動の仲間との交流は《趣味を楽しむ相手は、互いに観察し生活を把握することはできるから、それ以上の関係の深まりは求めない》だけでなく《趣味活動は一人でできないから一緒に楽しむ仲間は必要だが、趣味を楽しむ以外のつき合いはか

えって負担に感じる》ことから趣味を楽しむ以上の関係に進展することに負担を述べている。しかし《外出できる間は、外での趣味活動が負担なく交流でき、自宅での交流は負担に思えるが、外出できなくなると自宅での交流が必要と思う》というように、活動に制限が生じたときの漠然とした将来の不安に対し、交流の必要性を語っていた。

2) 事例全体のまとめ

一人暮らし高齢者の趣味活動による交流の体験(図)は、【センターでの活動をと共に楽しむ】ことを通して、【一人で生活を切り盛りしているためゆとりがないがもっと活動を楽しみたい】という思いを醸成しつつも、【家族への義務がないというしるめたさ】や【自己の楽しみを優先するが楽しみきれない違和感】に気づき、【趣味活動を楽しむ仲間は欲しいが日常の交流は負担】という矛盾した思いに【生活を切り盛りすることで一人暮らしの寂しさから解放される】事故を体験し、【活動は負担でもありバランスが大事】と折り合いをつけていた。その活動と負担のバランスを通して【楽しみをセンター以外の場所でも共有する】ことに発展していた。活動と負担のバランスは、自己完結への傾向とつながりへの傾向と両方を併せ持っていたことから、これらのつながりへの傾向を見出し、力づける支援方法の開発が課題である。



図．一人暮らし高齢者の趣味活動による交流の体験

5．主な発表論文等

なし

6．研究組織

研究代表者 田場由紀 (TABAYUKI)

沖縄県立看護大学・看護学部・講師

研究者番号：30549027